昭和52年５月25日　第３種郵便物認可　令和５年４月10日発行（毎月１回10日発行）

円福

世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

4月

2023　No.511

世界法民連帯　円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のＳＡＢＡ運動で世界の平和に尽くしましょう。

ＳＡＢＡとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの１食１円のＳＡＢＡとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築（教育）や、井戸やトイレの設置（環境衛生向上）を支援する、国際ボランティア資金の運動です。１食１円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やＳＡＢＡ運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

四月から円福友の会エコ村支援サブディレクターに就任を予定しているラット氏です。

坂井氏が訪問した時に、たわわに実った果樹を見せてくれています。ラット氏は、体が不自由な奥さんと長男(麻痺)を抱えながら、借金は絶対するなという母の教えを堅く守って、勤勉に農業を営み、電気工事の技術も持って、円福友の会模範農家として頑張っています。坂井氏の訪問記(3 月号 11，12，13ｐ)をご覧になってください。そして、本文もご覧になってください。とても立派だと思います。

４月号の内容

にこにこ法話	一本のろうそくの火	１ｐ
カンボジア支援	これからの支援活動について	４ｐ
養育随想	子どもの幸せ	12ｐ

ニコニコ法話

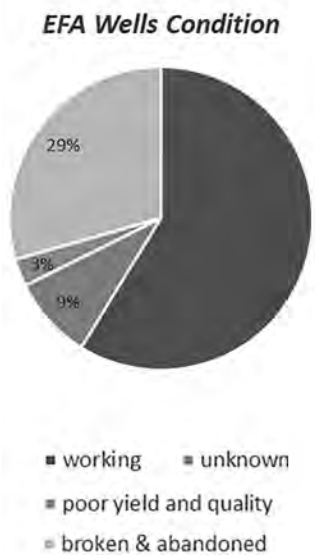
ソファット氏のコロナ禍を経た今のエコ村の報告をエクセルの表にまとめて確認してもらいました。

以下は、ソファット氏が見易くまとめてくれた円福友の会寄贈井戸と寄贈家族の状況の表とグラフです。

一本のろうそくの火

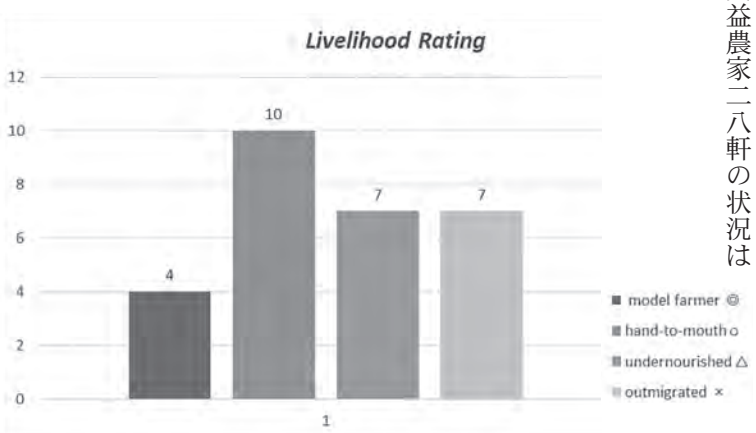
寄贈井戸三四本のうち、稼働中が二〇（五九％）、不明が三（九％）、少しか出ない一（三％）壊れたか無くなった一〇（二九％）でした。

たいへんです。



EFA well condition:		Nos.	%	Livelihood ratings		Nos.	%
working	○	20	59	model farmer		4	15%, hard skilled
unknown	?	3	9	hand-to-mouth		10	37%, survicved by
poor yield and quality	△	1	3	undernourished		7	22%, marginally
broken & abandoned	×	10	29	outmigrated		7	26%, sold the land
		34	100		Total farmers	28	100%

受益農家二八軒の状況は



模範農家四（一五％）、軍月給と農業で一〇（三七％）、超貧困七（二五％）、夜逃げ七（二五％）でした。

何と半数もの農家が、さまざまな理由から高利の借金に手を出し、ギャンブルに手を染め、アルコール依存症になり、ＤＶで家庭を破壊し、借金を返済できずに夜逃げをするか、極貧状況になっているのでした。井戸を寄贈してあげたのにこのような悲惨な状況になったことに悲しく、ソファット氏に理由を聞いてみました。すると、ソファット氏も心を痛めていると次のように返信がありました。

カンボジアは五十年も続いた内戦のトラウマが今も残っていて、独裁が続く政府は汚職、贈賄、身びいきなどで私腹を肥やし、市民のための政治をしない。それは絶望的な状況で、日本はもちろ

ん、隣国のタイやベトナムがうらやましい、と。吉田顧問が内戦により密告社会ができ、人が疑心暗鬼になって、私腹を肥やし、共助の社会を築くことが難しくなっていると話してくれたことも思い出しました。

彼自身が内戦で父母きょうだいすべてを殺され、瀕死の中を生き抜いた経験があり、その言葉から彼の絶望的なうめき声が聞こえるようです。

それで、私は彼を励まそうと、次のように返信しました。

一本のろうそくの灯はそれが点いている限り、無限の数のローソクに火を灯すことができる。エコ村の実践が成功すれば、それがローソクの灯になって、カンボジアの人々の、集落の心のローソクに灯をつけて、カンボジア全土に広がるよ。頑張ろうと。

円福友の会の実践も、愛育園の実践も、幼稚園の実践も、それが赤々と輝くローソクの火となって、社会の、日本の、世界の人々の心のローソクに火を灯し拡がることを願っています。

カンボジア支援

カンボジア　エコ村支援再開（その七）
これからの支援活動について

円福友の会顧問　吉田恒昭

先月号は、マニラ在住の坂井和さんからのエコ村現地視察に関しての素晴らしい報告記事でした。円福のカンボジア・ツアーがしばらく滞っていましたので、記事は誠にタイムリーで有難くエコ村の現況を理解するのにとても貴重でした。深甚のお礼を申し上げます。

坂井さんは大学卒業後から一貫して途上国開発協力に携わってこられた方ですので、初めてのカンボジア奥地寒村訪問でも全く気後れすることもなく、村道脇の簡易食堂でナマズ料理を食べ、支援農家でココナツジュースを飲み、ラットさんの手料理に舌鼓を打っていました（写真③参照）。途上国の訪問で現地の人々との相互信頼を一瞬で勝ち取る極意は『現地郷土の味を美味しく笑顔で頂くこと』なのです。

坂井さんの現地視察報告の内容は温かくも鋭い観察に満ちていました。とりわけ記事の最後に記されている『厳しい現実と苦しい生活の中で、暗い表情を見せることなく温かく私を迎えて下さったエコ村の皆さんには深く心を打たれました。そして皆さんと強い信頼関係で結ばれているソファットさんの姿に尊敬の念を抱きました』の結語に、私はエコ村支援の将来に、たとえ今はコロナ禍で呻吟していても、一条の光を見出すことが出来ます。

ソファットさんが坂井さんの訪問時に撮った多くの写真の中で、私がとりわけ注目したのは、多角的営農に果敢に挑戦する農家の姿です。例えば写真①はソッカさん宅での泡盛（米から作る蒸留酒）製造設備、養豚小屋、そして隣人のトンさんが挑むココナツ栽培の姿です。これらに見られる農家のヤル気（内発的動機）を円福友の会は彼らへの営農技術

指導を通して自立的生計向上を図れないかとの思いを強くしました。

エコ村が開村して十有余年、残念ながらエコ村の農家数は減少し続けています。十年前の二〇一二年には一七〇〇戸もあった農家数が二〇一六年には一二八五戸に減り、そして二〇二〇年には五九〇と開村時の約三分の一に激減してしまっているのです。そしてコロナ禍を経て、この数は更に減少しているようです。坂井さんが見学した養魚灌漑池の周辺地区では農家の離村が止まらないと、事業を担当している人から聞き及んでいます。

写真①　左からソッカさんの泡盛製造設備、養豚小屋、トンさんのココナッツ栽培

幸運にも円福友の会が支援をしているナチュラル小学校地区のエコ村の西部地区では何とか生存限界で持ちこたえているようです。この地区へ入植した家族は少なからず国境警備兵や退役軍人の家族で、最低限の月収があり生計を保っているのです。

ソファットさんはこの数か月間にわたり円福友の会支援の井戸三四基と家族二八家族の現況を調査してくれました。かなり定性的な評価になりますが、二八家族の内で離村したのは七家族です。残りの二一家族の内、僅か四家族が多角的集約的営農に成功し無借金で生計を維持しています。一〇農家は借金の返済に苦しみながら食うや食わずの生活です。そして栄養不良の兆候が見られる農家が七家族と報告してくれました。この十年間でのエコ村全体の離村農家の割合が六割近いことからすれば、円福支援地区は比較的良い状況と言えると思います。

三四基の井戸の稼働状況についての調査では二〇基は順調に機能していますが、離村七家族の井戸を含めて一〇基の井戸が使われていません。残りの四基は未報告です。地下水が枯渇したという報告はないのは今後を考える時には光明です。このように円福支援の成果はその期待に十分沿うものとは言えませんが、もし井戸が設置されていなければ農民がどのような窮状に遭遇したかは想像に難くありません。

坂井さんの記事では、コロナ禍での苦境の中でも、農民の姿にいくつもの明るい兆候を見出しています。そして、ソファットさんがどれだけ現地の住民から信頼されているかが分かります。私も経験がありますが、ソファットさんと一緒に村に入ると、村人はまるで彼が親類縁者でもあるかのように笑顔で彼に近寄ってきます。今回の坂井さん達の突然の訪問に対しても、近所の農家の人々が自然発生的に集まり意見を交わし合う姿は、村人に芽生えてきた連帯感と共助の姿だと思います。

加えて、坂井さんがラットさんの家で見つけた藤本住職から頂いた額入りの表彰状です（写真②）。二〇一六年の円福ツアーで行われた小学校農園開所式で十数人の篤農家に対して円福事業に協力してくれた農家を対象に僅かばかりの金一封と表彰状が藤本住職から渡されました。彼らは人生で表彰状授与されたのは初めてだと大いに喜んでいました。表彰された篤農家の人たちはこぞって表彰状を居間の壁に貼って誇りにしています。円福友の会と村人たちとの絆が強く生きている事は大きな喜びです。

写真②　ラットさん宅の居間の壁に掲げられた表彰状

円福友の会は『水あるところに仏あり』で

先ずは井戸を支援しました。井戸支援を行う前にはソファットさんに綿密な農家基本調査を行い、水に対する基本的な知識の有無や水をどのように生活、衛生、農業生産に生かすか、故障をした時の対応などを事前に学習してもらいました。外部からの突然の善意に満ちた支援介入は、ともすれば一過性で、かえって村の伝統的生産関係や相互依存の均衡状態を崩壊させて、コミュニティを不安定化させる要因もともなります。伝統的な農村コミュニティ（社会）には長い年月を経て蓄積された多くの暗黙知に満ちているのです。外部者がそれを無視してアレコレと“飴玉”を配りながら指図すると、一時的な損得勘定で一見うまく人々が動いているように見えますが、それは内発的な動機づけからではないので、持続可能ではなく自立的な成長には繋がらないのです。

　これまでの円福友の会の支援が繰り返してきたスローガンである『村人の村人による村人のための』支援に立ち戻ることが不可欠です。このスローガンは開発協力の理念の『内発的動機付けによる開発』という概念です。ちょっと難しい言い方となりますが、開発の目的と手段を論理的に繋げて造られる事業計画は住民自身の主体的内発的な動機によって策定され、彼らの主体的な行動によってこそ『住民の住民による住民のための事業』となり得るのです。そうであればこそ事業の持続的な発展と住民自身の自立的成長が期待できるのです。

　考えてみれば藤本住職が児童養護施設の愛育園で日夜奮闘しつつ、大いなる喜びをも感得できるのは、児童の内発的で主体的な行動から見えてくる彼らの持続的な成長の姿からではないでしょうか。子供たち自身が内発的に『やる気スイッチ』を起こさせるように仕向け、彼らが自立のための社会的適合力を身に着けることこそが愛育園の役割なのだとの思いです。

　以上のように外部者による支援の役割と限界を踏まえて、これからの円福友の会のエコ

村支援の方向を具体的に考えてみました。エコ村では農業生産の要素である土地、労働(技術を含む)、そして生産財と市場はそれなりに存在しています。しかし深刻な貧困が蔓延しています。その主たる要因は何なのでしょうか。約十年間のエコ村支援での実践と観察を経て貧困の主要因は明らかになりました。それはモデル農家ともいうべきマオさんとラットさんたちの成功によって実証されたのです。彼らの多角的集約的営農の成功の要因は営農技術が優れていること、勤勉であること、市場を意識していること、借金が無いことの４要素なのです。要約すればラットさんの多角的集約的営農技術を他の近隣農家へ移転普及させることができれば、困窮する農家の生計向上が期待できる貧困脱出の処方箋になり得るのです。

それでは、どうやってラットさん型多角的集約的営農技術を他の農家に普及させるのでしょうか。これからの円福友の会の望ましい支援に関して、この半年は辛抱強くソファットさんと農民リーダー達からの〝内発的な提案〟を待ち続けました。こちらからの提案の押しつけは禁物ですので、彼ら自身が現状の課題をどう認識し、その解決手段について十分に話し合って提案をして欲しいと願っていたのです。

十年前に円福友の会が井戸掘削支援を始めた当初から、私は農業の経験が少ない入植者家族への多角的で集約的な営農技術の普及が生計向上の鍵であることは分っていました。だからこそ小学校学校農園での児童による実践的体験を介して、願わくば、児童家族への営

写真③　多角的集約的営農の天才とも言うべきラットさん、利他に篤いラットさんです

農技術移転を目論んだのでした。しかしながらコロナ禍での学校閉鎖なども重なって小学校の児童に技術移転の役割を期待するのは彼らにとっては荷が重すぎたようで成果には限界がありました。今後は学校農園よりも農家への直接的な営農技術指導に取り組むべきではないかと考え、カンボジア国内の農村開発NGOのCEDACの営農技術普及指導員をエコ村に派遣駐在させる案をソファットさん達に提案してみました。この提案は十年前にエコ村農家四軒をパイロット・ファームに指定し、実際にマオさんとドイソクさんがこのパイロット・ファームで素晴らしい実績をあげた経験を踏まえての提案でした。

この私の提案に対してソファットさんとラオさんが二人で緊密に相談協議してまとめてきた案は、まさに村人の村人による村人のための（内発的主体的）提案で、藤本住職と私は大いに驚きました。

彼らとの数回のやりとりを経て彼らが提案してきた計画の概要は以下のようなものです。

(1)

追加的な井戸設置　円福友の会支援地区では井戸が住民の命であることに疑いはない。井戸のない農家は森林動植物の採取で糊口を凌いでおり、井戸設置を希望する農家は多い。勤勉・誠実・互助を尊ぶ農家を見極め円福の予算内で約十基の井戸を掘削設置したい。このために直ぐにでも農家基本調査を行って支援農家を選定したい。支援農家同志の助け合いと営農技術グループ研修を行うべく井戸設置農家はクラスターにすることが望ましい。

(2)

ソファットさんとラットさんがタッグを組んで農家巡回指導を行う。近隣農家から信頼と尊敬を得ているラットさんが週一回半日を割いて支援農家を巡回し、各農家の事情に沿った多角的集約的営農指導を実技指導する。指導内容はラットさんが成果を挙げている経験知を踏まえての指導である。時に応じて近隣農家グループ実演指導も行

(3)

う。ラットさんは『村の電気屋さん』としても信望があり数年前に電化した農家電気配線を手助けしている。巡回指導は週に一回半日の頻度で小学校農園での営農指導も含まれる。ソファットさんとラットさんの現地巡回と営農技術普及サービスに対しては彼らの直接経費に加えて応分の謝金を出来高払いを原則として支払うこととする。

多角的・集約的営農促進のための投資助成。　ソファットさんとラットさんによる農家への直接巡回営農技術指導に合わせて各農家の事情に合わせた多角的集約的営農支援（所得向上生産活動）を目的として各農家が行う投資への助成金として上限三〇〇ドルの現物投資（苗木、農具、家畜など）を支給する。助成金を受領した被支援農家は成果を生み出した時点で助成金の二割相当分をソファットさんが作る銀行口座に寄付し、将来的に設立される無尽講（結）互助会の設立基金積み立てとする。

(4)

農家グループの会合促進　被支援農家は二か月に一回の集会をソファットさんとラットさんの下で各農家回り持ち周りで開催し、問題点や解決法などについての話し合いと共助親睦に勤めて相互信頼の醸成に努める。将来的には上記互助会の設立を目指すこととする。

(5)

事業管理体制と記録報告　この巡回営農技術指導事業は二〇二三年四月からの一年間の試行期間として実施し、一年後に成果の評価を踏まえて事業継続の有無あるいは改革更新などを協議することとする。事業の進捗はラットさんが毎週末ごとにソアファットさんへ携帯などで報告をし、この現場報告を踏まえて、ソファットさんは月例報告を円福友の会へ行うこととする。

(6)

上記の内容を踏まえて三者の役割と任

務を明記した覚書を三者署名の上で交わすこととする。

以上のようなことを内容とする事業計画の提案が現地ソファットさんとラットさんからなされたのです。藤本住職も私もラットさんの心意気に驚きました。彼は私が今まで何回も誌上で彼の並外れた勤勉性新規性そして利他精神に溢れた姿を報告してきました。彼らの提案をうけて、ラットさんへの負担が大きすぎて現実的ではないとコメントしましたが、彼には有能な長男が後継ぎをしており生計を助ける手当を頂ければ大丈夫とのことでした。ともかくもソファットさんラットさんそして円福の三者の責任と任務を明確にしてお互いが納得の上での合意結果が上記の内容でした。

写真④　左からソファットさんとモデル農家のラットさん、ソクさん、セインさん、マオさん

この四月からソファットさんとラットさんが上記の合意の下で活動を始めます。彼らの内発的な提案に大いに期待し共に行動したいと思います。事業が動き出せば予期せぬことが多発しそうです。これまでお互いに築いた深い信頼関係を踏まえて、臨機応変での対応が求められることと思います。彼らと共に歩みたいと思います。友の会会員の皆さまの更なるご理解とご指導を賜りたいと思います。

写真⑤　左からラットさん学校農園に堆肥を届ける、肥料を調合する、後継ぎの長男（右端）

養育随想

子どもの幸せ

円福寺愛育園　園長　藤本光世

社会的養護の子どもの最善の利益とは子どもが幸せな生涯を送れるように育てることです。私はこのことは、間違いないと確信しています。

でも、国は、そして県は、「子どもの最善の利益とは子どもが幸せな生涯を送ることである」とどうして言わないのでしょうか。不思議です。

このことを考えるうちに、国も県も社会も「幸せに生きる」とはどんなことであるかについて、明確な答えを持っていないのではないかと疑問を持つようになりました。あるいは、「幸せに生きる」は人の価値観の問題で踏み込まないようにしているのかなあ。

例えば、今日（二十七日）の読売と地元紙の長野県の高校生の活動を取り上げた記事は対照

的でした。
読売は書道パフォーマンスで全国優勝（三連覇）した高校をその作品（写真）と共に取り上げていました。その記事の中で三年間やって来て最も心に残っている場面は何ですかと言う問いに台風十九号の被災者に向け「希望」の二文字を書いたパフォーマンスを挙げていました。その時、この生徒は一年生でボンボンを持って盛り上げる役目だったのですが、見ていた女性が「この言葉を胸に強く生きていきます」と話されたのです。
地元紙は「大人の言う「青春」なくても」と県内の高校生十四組が長野で卒業ライブを開催したことを、ピンクの光りが交差するライブ会場の写真と共に報じていました。
これらは、幸せのとらえ方が違います。
皆さんはどう思いますか。

日本を美しくする会の鍵山秀三郎氏は南長野仏教大学講座で次のように話されています。（平成六年仏教大学講座講義録　心のめざめⅡ　一九三ｐ　平凡なことを非凡に）少し長くなりますが、大切なことと思い紹介します。
さて日本人は今、一億二千五百万人ほどいるそうですが、いろいろな生活をしている人がおります。
まあ中には、東京の新宿駅に毎日夕方になると、段ボールを持ってきて寝てる人も四、五十人いるそうですし、山谷とか大阪の釜ヶ崎でその日暮らしをしている人もいます。いろいろな

人が日本にいるわけですけれども、どんな境遇にあっても、自分が人並み以下で人生を送っていいんだと思っている人は一人もいない。出来れば人並みにはなりたい。なお欲を言えば、人並み以上になりたい。なろうことなら特別な存在になりたい、というふうに人間は誰でも願いを持っているんです。

「おれなんかどうでもいいんだ」「私なんかもうどうでもいい人生よ」なんて口で言っている人でも、その心の奥底には、出来れば人に認めてもらいたい、人に尊重もされたい、とそういう気持ちを強く持っているんですね。

そうしますと、その特別な存在になるためにはどうするか。何か特別なことをしないと、特別な人間になれないと思って、特別なことを探してあるく人が大変多いわけですが、世の中にそんな特別のことなんていうのは一つもなくて、ごく平凡なことの積み重ねしかないのです。

先ほど、石上先生（石上善應大正大学教授）が種田山頭火の話をしましたけれども、山頭火は「金も無い、物も無い、歯も無い私」という詩を残しております。

私も同じように、金も物も無く、若いのに虫歯ばかりで自分の歯も満足には無くて、その上に意気地が無いという、本当に無いものばっかりで四十年前に東京へ出てまいりました。

しかし私は幸いなことに、自分が何も才能が無いということを自覚しておりましたから、何でもないような平凡なことを徹底してやろうと心に決めたのです。しかも、平凡なことをただやるだけじゃなく、その質を上げていこうと思いました。

例えば、ほうきを握る、雑巾を持つというようなことでも、どうしたら効率よくできるのか、

その日の天気の状況によって掃除の仕方も変える。うちの会社へ掃除研修に来られる大勢の方にも、雑巾の絞り方から教える。どんな平凡なことでも質を上げながらやっていると、ある日突然に非凡に変わると気がついたからです。どんな些細なことにも心を込めて、私はたゆまず進むというやり方をしてまいりました。（中略）

続いて、「気づく人になる」（二〇〇ｐ）に次のように書かれています。

この四十年間の社会生活を通して、大勢の人を見てますと、一生懸命やってるのになかなか成功しない人、そんなに骨折っているようには見えないのに、やることなすことうまくいく人の二つがあるように感じました。

もちろんそれは運不運もあって、自分の選んだ仕事、まあ農業であるならば、その年に選んだ作物が天候の具合によって、良かったり悪かったりということもありますけれども、そういうことは一年二年のことで、長い目で見ればやはりそれは自分に原因があると思います。

物事を成果に結びつけている人は、実によく気がつく人ですね。たとえば、今年失敗して次の年も失敗して、三年続けて失敗しても四年目には必ず成果に結びつける。

気がつかない人は、今年良くても次の年が駄目で、その次も駄目で次が良くても又駄目だというふうに、ばらつきが多い。

気づく人は失敗を重ねていながら、失敗から学んで、それを成果に結び付けていくという力を持っておりますけれど、気付かない人は、どうもそうではないと思いました。

では、気付く人になるためにはどうしたらいいか。いろいろな方法はあるんですけれど、私

はいつも二つ挙げてそれをお勧めしています。

一つは、徹底した掃除をするということです。ただ単に、わたしもやってますなんていう簡単なものではなしに、徹底して掃除をする。

その掃除をすることによって、どういうことで良くなっていくかというと、掃除をしている間に、小さなものの持っている命、価値を見出す力が備わっていくように思うのです。（中略）

それからもう一つは、自分の体、自分の手足を使って人を喜ばす、という考え方をいつも持つと、実にいろいろ気がつくようになるんですね。

日本一の山小屋燕山荘の赤沼健至社長さんも、お掃除によって気付くようになると話されていたのを思い出しました。椅子が曲がっていたらそれに気付いてなおす。はきものが曲がっていたらそれに気付いてなおす。このことによって、燕山荘の周りに住む熊まで立派になったと。

人並みで生きる願いは、幸せに生きる願いと同じではないでしょうか。誰もが出来たら人に尊重されたい（幸せに生きたい）という気持ちを強く持っています。そうなるためにどう生きればよいか。そして、子どもをどう育てれば良いか。鍵山秀三郎氏の言葉にその鍵があるように思います。

感謝のお知らせ

令和五年三月分
（二月二十八日～三月二十七日）

●ＳＡＢＡ資金
（栃木県）様
（千葉県）様
（埼玉県）様
（神奈川県）様
（長野県）様

●エコ村支援
（千葉県）様
（東京都）様
（埼玉県）様
（長野県）様

●タイスラム奨学生支援
（千葉県）様
（東京都）様
（埼玉県）様
（長野県）様

●おもいやりの会
（千葉県）様
（埼玉県）様
（長野県）様

●ウクライナ支援
（長野県）様

ご協力ありがとうございました。

四月の法母会

二十三日（第四日曜日）
午前八時半より

五月の参禅会

七日（第一日曜日）
早朝五時より

時間が早まります。事故に遭わないよう、お気をつけておいで下さい。

『円福』 令和5年4月号
第五一一号
定価一五〇円

発行日　令和5年4月10日
発行人　藤本光世
発行所　円福友の会
〒388-8005 長野市篠ノ井横田円福寺
TEL(〇二六)二九二―〇三八一
FAX(〇二六)二九三―九六二九
振替口座
〇〇五二〇―七―一六二五六

円福友の会・ＳＡＢＡスクール

愛の日の丸　ＳＡＢＡ運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア　エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援（教育里親）

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会（愛育園児童自立支援）

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の **協力金は**　郵便振替 **00520－7－16256**
加入者　**円福友の会**　あてに御送金下さい

〒388-8005　長野市篠ノ井横田 円福寺内
TEL　０２６－２９２－０３８１
FAX　０２６－２９３－９６２９
http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/
enpuku2@janis.or.jp